

---

## 開 会 挨拶

---



竹内整一氏

【竹内整一（鎌倉女子大学教授）】 それでは時間がまいりましたので、日韓国際研究会議「東アジアの死生学へ」を始めさせていただきます。私は鎌倉女子大学の竹内整一でございます。二〇一〇年三月まで、東京大学でCOE死生学プロジェクトに参加してまいりました。今も客員として参加しておりまして、今日は司会を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

【金汰倅（成均館大学校首席研究員）】 韓国側の司会を務めます成均館大学校人文科学研究所首席研究員の金汰倅キムテッキョンでございます。今回の共同国際会議のコーディネートをさせていただいております。本



李熙穆氏

日はよろしくお願いいたします。

【竹内】 それでは会を始めるにあたりまして、開会のご挨拶をお願いいたします。まず成均館大学校人文科学研究所所長・李熙穆先生、お願いいたします。

【李熙穆（成均館大学校人文科学研究所所長）】 まず、はるばる東京からお越しいただきました竹内教授をはじめ、各先生方、研究員の皆様方に心より御礼申しあげます。成均館大学人文科学研究所所長をやっております李熙穆でございます。死生学を専門とする研究者の方々をお招きしてこのような会議を持たたことを、大変光栄に思っております。

私の専門は漢文学、特に朝鮮の古典漢文学ですが、当然のことながら、この分野も死生学の問題と関わっているところが多くあります。ですが、自分の不勉強もございまして、今までは死生学という学問分野にあまり関心を持っていませんでした。しかしこの会議をきっかけにして、自分の理解も深めていきたいと思います。ありがとうございます。

最近韓国では「九九八八三三曰」という言葉が流行っています。これは、「九十九歳まで元気に生きて、二、三日患ってポックリ死のう」という意味の言葉です。このようなものは、一般の人々の、ある死生観のあらわれであると考えられます。



池澤優氏

この国際会議における両国の先生方の活発な討論および意見交換が、死生学研究のさらなる発展につながる一つのきっかけになれば、と期待しております。

最後に、このような国際会議は当然成均館大学構内で行うべきだったのですが、ちょうど韓国の入試時期でございまして、仕方なくこのような大学外での開催となりましたことを深くお詫び申し上げます。

【竹内】引き続きまして、東京大学大学院人文社会系研究科の池澤優先生からご挨拶をお願いします。

【池澤優（東京大学教授）】 ただいまご紹介いただきました池澤でございます。東京大学COEプロジェクトの代表として、一言申しあげたいと思います。

「東アジアの死生学へ」と題されましたこの会議は、今回で三回目になります。最初は二〇〇八年に中国の北京で、COEと、中国社会科学院の研究者を中心とする中華日本哲学会との共催で行われました。二回目は二〇〇九年に台湾の台北で、国立政治大学と共催で行いました。今回、ソウルで成均館大学校との共催でこのような場を持ってましたことにつきまして、李熙穆先生をはじめとする皆様方に、心より感謝申し上げます。

私どものCOEプロジェクトは、設立されてから今年で九年になります。その活動内容についてはこの後鄭孝雲先生のご発表内でも触れられておりますので、ここでは詳しいことは省略いたしますが、鄭先生にも

ご紹介いただいていますように、私たちの目的の一つには、西洋におけるタナトロジー (Thanatology) を相対化しようということがございます。そのことによつて、東アジアにおいては死がどのようなものとして捉えられてきたかを研究することを重視しており、それがこの「東アジアの死生学へ」という連続した研究会議につながっているわけです。

今までの会議で見えてきたことは、大きく二つあるように思います。一つは、東アジアの諸国・諸文化で、いわゆる「西洋近代」というものへの違和感とも言ふべきものを共有しているということ。二つめは、そのような違和感を共有しているにもかかわらず、それぞれの国や地域をくらべると、おのおのの文化的伝統に基づくかなり大きな差異・違いというものがあるということです。

この会議が、韓国と日本の間の共通性と差異というものについての認識を深めることにつながったら幸いです。簡単ではございますが、COE側からの挨拶とさせていただきます。

【竹内】 それでは、ここで記念品を交換いたします。

(拍手)